

寸情風土記

泉鏡花

青空文庫

かなぎは 金澤の正月は、お買初め、お買初めの景氣の好い聲にてはじまる。初買なり。
 ふつか よなか 二日の夜中より出立つ。元日は何の商賣も皆休む。初買の時、競つて紅鯛と
 えんぎ て縁起ものを買ふ。笹の葉に、大判、小判、打出の小槌、寶珠など、就中、緋に
 そめいろ 染色の大鯛小鯛を結付くるによつて名あり。お西様の熊手、初卯の繭玉の意氣な
 ほこく 北國ゆゑ正月はいつも雪なり。雪の中を此の紅鯛綺麗なり。此のお買初めの、
 ゆき まよなか 雪の眞夜中、うつくしき灯に、新版の繪草紙を母に買つてもらひし嬉しき、忘れ難し。
 ふつか よまち おなじく二日の夜、町の名を言ひて、初湯を呼んで歩く風俗以前ありたり、今もある
 ほんちやう べし。たとへば、本町の風呂屋ぢや、湯が沸いた、湯がわいた、と此のぐあひなり。
 はんでんむか これが半纏向うはち巻の威勢の好いのでなく、古合羽に足駄穿き懷手して、のそ
 ある りくと歩行しながら呼ぶゆゑをかし。金澤ばかりかと思ひしに、久須美佐渡守の著す、
 なには 浪華の風と云ふものを讀めば、昔、大阪に此のことあり——二日は曉七つ時前より
 しちうほう 市中螺など吹いて、わいたわいたと大聲に呼びあるきて湯のわきたるをふれ知らず、江
 と 戸には無きことなり——とあり。

うちがみ 氏神の祭禮は、四五月頃と、九十月頃と、春秋二度づゝあり、小兒は大

喜よろこびなり。秋あきの祭まつりの方はな賑ぎし。祇園ぎをん囃子ばやし、獅子ししなど出いづるは皆みな秋あきの祭まつりなり。子供こどもたちは、
 手てに手てに太鼓たいこの撥ばちを意ようして、社やしろの境けい内だいに備そなへつけの大太鼓おほだいこをたゞきに行ゆき、また車くるま
 のつきたる黒塗くろぬりの臺だいにのせて此これを曳ひきながら打う囃なして市中しちゆうを練ねりまはる。ドバンガド
 ン。こりや、と合あひの手てに囃はす。わつしよいくと云いふ處ところなり。
 祭まつりの時ときのお小遣こづかひを飴買あめかひ錢ぜにと云いふ。飴あめが立たてものにて、鍋なべにて暖あためたるを、麻あさ穀がらの
 軸ちくにくるりと卷まいて賣うる。飴買あめかつて麻あさやろか、と言いふべろんの言葉ことばあり。饅頭まんちゆう買かつて皮かは
 やろかなり。御祝儀ごしうぎ、心づけなど、輕少けいせうの儀ぎを、此これは、ほんの飴買あめかひ錢ぜに。
 金澤かなざはにて錢百ぜにと云いふは五厘りんなり、二百が一錢せん、十錢せんが二貫くわんなり。たゞし、一圓ゑんを二圓ゑん
 とは云いはず。

蒲鉾かまぼこの事ことをはべん、はべんをふかしと言いふ。即すなはち紅白こうはくのはべんなり。皆板みなたについた
 まゝを半月はんげつに揃そろへて鉢はち肴さかなに裝もる。逢あひたさに用ようなき門かどを二度三度、と言いふ心意氣こころいき
 にて、ソツと白壁しろかべ、黒堀くろべいについて通とほるものを、「あいつ板附いたつきはべん」と言いふ洒落しやれあ
 り、古い洒落ふるしやれなるべし。

お汁つゆの實みの少すくないのを、百間堀ひやくけんぼりに霰あられと言いふ。田螺たにしと思おもつたら目球めだまだと、同おなじ格かくなり。
 百間堀ひやくけんぼりは城しろの堀ほりにて、意氣いきも不意氣ふいきも、身投みなげの多おほき、晝ひるも淋さびしき所ところなりしが、埋立うめたて

たれば今はなし。電車でんしやが通る。満員まんゐんだらう。心中しんちゆうしたのがうるさかりなむ。

春雨はるさめのしめやかに、謎なぞを一つ。……何枚衣なんまいきものを重ねても、お役やくに立つは膚はだばかり、

何なに?……筭たけのこ。

然しかるべき民謡集みんやうしふの中に、金澤かなざはの童謡どうやうを記しるして（鳶とんびのおしろに鷹匠たかじよが居る、あつ

ち向むいて見みさい、こつち向むいて見みさい）としたるは可よきが、おしろに註ちゆうして（お城しろ）とし

たには吃驚びっくりなり。おしろは後のなまりと知るべし。此この類るゐあまたあり。茸狩たけがりの唄うたに、

（松まつみ、松まつみ、親おやに孝行かうかうなもんなもんに當あたれ。）此この松まつみ、に又註またちゆうして、松茸まつたけとあり。

飛とんだ間違まちがひなり。金澤かなざはにて言いふ松まつみは初茸このこなり。此この茸こきは、松美まつつくしく草淺くさあさき所ところにあ

れば子供こどもにも獲えらるべし。（つくしん坊ばうめつかりこ）ぐらゐな子供こどもに、何處どこだつて松茸まつたけ

は取とれはしない。一體いつたい童謡どうやうを收録しうろくするのに、なまりを正ただしたり、當推量あてずありやうの註ちゆうし

釋やくは大の禁物きんもつなり。

鬼おにごつこの時とき、鬼おにぎめの唄うたに、……（あてここに、こてここに、いけの縁ふちに茶碗ちやわんを置おいて、

危あぶないことぢやつた。）同おなじ民謡集みんやうしふに、此このいけに（池いけ）の字じを當あててあり。ああの土地とちに

て言いふいけは井戸ゐどなり。井戸ゐどのふちに茶碗ちやわんゆゑ、けんけんのんなるべし。（かしや、かなざ

もの、しんたてまつる云々）これは北海道ほくかいだうの僻地へきちの俚謡りやうなり。其處そこには、金澤かなざはの人ひと

多人數、移住したるゆゑ、故郷にて、（加州金澤の新堅町の云々）と云ふのが、次第になまりて（かしや、かなざものしんたてまつる。）知るべし、民謡に註の愈々不可なること。

新堅町、犀川の岸にあり。こゝに珍しき町の名に、大衆免、木の新保、柿の木畠、油車、目細小路、四這坂。例の公園に上る坂を尻垂坂は何した事？母衣町は、十二階邊と言ふ意味に通ひしが今は然らざる也。——六斗林は筍が名物。目黒の秋刀魚の儀にあらず、實際の筍なり。百々女木町も字に似ず音強し。

買物にゆきて買ふ方が、（こんね）で、店の返事が（やあく。）歸る時、買つた方で、有がたう存じます、は君子なり。——ほめるのかい——いゝえ。

地震めつたになし。しかし、其のぐらゝと來る時は、家々に老若男女、聲を立てて、世なほし、世なほし、世なほしと唱ふ。何とも陰氣にて薄氣味悪し。雷の時、雷やまへ行け、地震は海へ行けと唱ふ、たゞし地震の時には唱へず。

火事をみて、火事のことを、あゝ火事が行く、火事が行く、と叫ぶなり。彌次馬が駈けながら、互に聲を合はせて、左、左、左、左。

夏のはじめに、よく蝦蟆賣りの聲を聞く。蝦蟆や、蝦蟆い、と呼ぶ。又此の蝦蟆賣りに

限りて、十二三、四五位ぐらゐなのが、きまつて二人ふたり連れりづにて歩くなり。よつて怪けしからぬ二人ふた連れを、畜生ちくしやう、蝦蟆がまうり賣め、と言いふ。たゞし蝦蟆がまは赤蛙あかがへるなり。蝦蟆がまや、蝦蟆がまい。――
 ―そのあとから山男やまとこのやうな小父をぢさんが、柳やなぎの蟲むしは要いらんかあ、柳やなぎの蟲むしは要いらんかあ。
 鯖さばを、鯖さばや三番叟さんぼそう、とすてきに威勢みせいよく賣うる、おやく、初はつ鰹かつの勢いきほひだよ。鰹いわしは五ご月がつを季しゆんとす。さし網鰯あみいわしとて、砂すなのまゝ、筴さる、盤はん臺だいにころがる。嘘うそにあらず、鯖さば、
 鰯いわしほどの大さなり。値安あたやすし。これを焼やいて二十食くつた、酢すにして十食くつたと云ふ男をとこだて澤た山さんなり。次手ついでに、目刺めさしなし。大小だいせういづれも串くしを用もちゐず、乾ほしたるは干鰯ひいわしといふ。土と地ちにて、いなだは生魚なまうをにあらず、鰯ぶりを開ひらきたる乾ひものなり。夏中なつちうの好下物いゝさかな、盆ぼんの贈ぞうた
 答ふに用もちふる事こと、東京とうきやうに於おけるお歳暮せいぼの鮭さけの如ごとし。然さればその頃ころは、町々まちく、辻々つじく
 を、彼方あつちからも、いなだ一枚まい、此方こつちからも、いなだ一枚まい。
 灘なだの銘酒めいしゆ、白鶴はくつるを、白鶴はくかくと讀よみ、いろ盛ざかりをいろ盛もりと讀よむ。娘盛むすめざかりも娘盛むすめもりだと、お嬢じやうさんのお酌しやくにきこえる。

南瓜たうなすを、かぼちやとも、勿論もちろん南瓜たうなすとも言いはず皆みなぼら。眞桑まきはを、美濃瓜みのうり。奈良漬ならづけ
 にする浅瓜あさうりを、堅瓜かたうり、此この堅瓜かたうり味あじよし。

蓑みのの外ほかに、ばんどりとして似にたものあり、蓑みのよりは此この方ほうを多く用もちふ。磯一峯いそいつぼうが、(こ

し地紀行）に安宅の浦を一里左に見つゝ、と言ふ處にて、

（大國のしるしにや、道廣くして車を並べつべし、周道如砥とかや言ひけん、毛詩の言葉まで思ひ出でらる。並木の松厳しく聯りて、枝をつらね蔭を重ねたり。往來の民、長き草にて蓑をねんごろに造りて目馴れぬ姿なり。）

と言ひしはこれなるべし。あゝ又雨ぞやと云ふ事を、又ばんどりぞやと云ふ習ひあり。祭禮の雨を、ばんどり祭と稱ふ。だんどりが違つて子供は弱る。

關取、ばんどり、おねぼとり、と拍子にかゝつた言あり。負けずまふは、大雨にて、重湯のやうに腰が立たぬと云ふ後言なるべし。

いつぞや、同國の人の許にて、何かの話の時、鉢前のバケツにあり合せたる雑巾をさして、其の人、金澤で何んと言つたか覚えてゐるかと問ふ。忘れたり。ぢぶきなり、其の人、長火鉢を、此れはと又問ふ。忘れたり。大和風呂なり。さて酔ばらひの事を何んと言つたつけ。二人とも忘れて、沙汰なし。

内證の情婦のことを、おきせんと云ふ。たしか近松の心中ものの何かに、おきせんとて此の言葉ありたり。どの淨瑠璃かしらべたけれど、おきせんも無いのに面倒なり。

眞夏、日盛りの炎天を、門天心太と賣る聲きはめてよし。靜にして、あはれに、可懷し。荷も涼しく、松の青葉を天秤にかけて荷ふ。いゝ聲にて、長く引いて靜に呼び來る。もんでん、こゝろウぶとウ――

續いて、荻、萩の上葉をや渡るらんと思ふは、盂蘭盆の切籠賣の聲なり。青竹の長棹にづらりと燈籠、切籠を結びつけたるを肩にかけ、二ツ三ツは手に提げながら、細くとほるふしにて、切籠ウ行燈切籠――と賣る、町の遠くよりきこゆるぞかし。

氷々、雪の氷と、こも俵に包みて賣り歩くは雪をかこへるものなり。鋸にてザクノと切つて寄越す。日盛に、町を呼びあるくは、女や兒たちの小遣取なり。夜店のさかり場にては、屈、竟な若い者が、お祭騒ぎにて賣る。土地の俳優の白粉の顔にて出た事あり。屋根より高い大行燈を立て、白雪の山を積み、臺の上に立つて、やあ、がばりくがばりくと喚く。行燈にも、白山氷がばりくと遣る。はじめ、がばりくは雪の安賣に限りしなるが、次第に何事にも用ゐられて、投賣、棄賣り、見切賣りの場合となると、瀬戸物屋、呉服店、札をたてて、がばりく。愚案ずるに、がばりは雪を切る音なるべし。

みづたまさう
水玉草を賣る、涼し。

夜店に、大道にて、鱒を割き、串にさし、付焼にして賣るを關東焼とて行はる。
蒲焼の意味なるべし。

四萬六千日は八月なり。さしもの暑さも、此の夜のころ、觀音の山より涼し

き風そよくと訪づるゝ、可懷し。

唐黍を焼く香立つ也。

秋は茸こそ面白けれ。松茸、初茸、木茸、岩茸、占地いろく、千本占地、

小倉占地、一本占地、榎茸、針茸、舞茸、毒ありとても紅茸は紅に、黄茸は

黄に、白に紫に、坊主茸、饅頭茸、烏茸、鳶茸、灰茸など、本草にも食

鑑にも御免蒙りたる恐ろしき茸にも、一つ一つ名をつけて、籠に装り、籠に狩る。茸

爺、茸、媼とも名づくべき茸狩りの古狸。町内に一人位つゝ必ずあり。山

入の先達なり。

芝茸と稱へて、笠薄樺に、裏白なる、小さな茸の、山近く谷淺きあたりに群

生して、子供にも就中これが容易き獲ものなるべし。毒なし。味もまた佳し。宇都

宮にてこの茸掃くほどあり。誰も食する者なかりしが、金澤の人の行きて、此れは結

構と豆腐の汁にしてつるゝと賞玩してより、同地にても盛に取り用ふるやうにな

りて、それまで名の無かりしを金澤茸と稱する由。實説なり。

茹栗、燒栗、可懷し。酸漿は然ることなれど、丹波栗と聞けば、里遠く、山遙に、仙境の土産の如く幼心に思ひしが。

松蟲や——すゞ蟲、と莫蔭きて、菅笠かむりたる男、籠を背に、大な鳥の羽を手にして山より出づ。

こつさいりんしかとて柴をかつぎて、※さん被りにしたる村里の女房、娘の、朝疾く町に出づる状は、京の花賣の風情なるべし。六ツ七ツ茸を薄に抜きとめて、手すさみに持てるも風情あり。

渡鳥、小雀、山雀、四十雀、五十雀、目白、菊いたゞき、あとりを多く耳にす。椋鳥少し。鶉最も多し。

じぶと云ふ料理あり。だしたちに、慈姑、生麴、松露など取合はせ、魚鳥をうどの粉にまぶして煮込み、山葵を吸口にしたるもの。近頃頻々として金澤に旅行する人々、皆その調味を賞す。

蕪の鮓とて、鰯の甘鹽を、蕪に挟み、麴に漬けて壓しならしたる、いろいろに、小鰯を紅く散らしたるもの。此ればかりは、紅葉先生一方ならず賞めたまひき。たゞし、

四時常にあるにあらず、年の暮に霰に漬けて、早春の御馳走なり。

さて、つまみ菜、ちがへ菜、そろへ菜、たばね菜と、大根のうろ抜き、葉、露も次第に繁きにつけて、朝寒、夕寒、やゝ寒、肌寒、夜寒となる。其のたばね菜の頃ともなれば、大根の根、葉ともに霜白し、其の味辛し、然も潔し。

北國は天高くして馬瘦せたらすや。

大根曳きは、家々の行事なり。此れよりさき、軒につりて干したる大根を臺所に曳きて澤庵に壓すを言ふ。今日は誰の家の大根曳きだよ、などと言ふなり。軒に干したる日は、時雨颯と暗くかゝりしが、曳く頃は霽、霰とこそなれ。冷たき然こそ、東たる日は、時雨颯と暗くかゝりしが、曳く頃は霽、霰とこそなれ。冷たき然こそ、東京にて恰もお葉洗と言ふ頃なり。夜は風呂ふき、早や炬燵こひしきまどゐに、夏泳いだ河童の、暗く化けて、豆腐買ふ沙汰がはじまる。

小著の中に、

其の雲が時雨れくて、終日終夜降り續くこと二日三日、山陰に小さな青い月の影を見る曉方、ぱらくと初霽。さて世が變つた様に晴れ上つて、晝になると、寒さが身に沁みて、市中五萬軒、後馳せの分も、やゝ冬構へなし果つる。やがて、とことはの闇となり、雲は墨の上に漆を重ね、月も星も包

み果てて、時々風が荒れ立つても、其の一片の動くとも見えず。恁て天に
 雪催が調ふと、矢玉の音たゆる時なく、丑寅辰巳、刻々に修羅磑
 を打かけて、霰々、又玉霰。

としたるもの、拙けれども殆ど實境也。

化かすのは狐、化けるのは狸、貉。狐狸より貉の化ける話多し。

三冬を蟄すれば、天狗恐ろし。北海の荒磯、金石、大野の濱、轟々と鳴り

とゞろく音、夜毎襖に響く。雪深くふと寂寞たる時、不思議なる笛太鼓、鼓の音あり、

山風につてトトンヒューときこゆるかとすれば、忽ち颯と遠く成る。天狗のお囃子

と云ふ。能樂の常に盛なる國なればなるべし。本所の狸囃子と、遠き縁者と聞く。

豆の餅、草餅、砂糖餅、昆布を切込みたるなど色々の餅を搗き、一番あとの白

をトンと搗く時、千貫萬貫、萬々貫、萬々貫、と哄と喝采して、恁て市は榮ゆるなりけり。

榧の實、澁く侘し。子供のふだんには、大抵柑子なり。蜜柑たつとし。輪切りにして

鉢ものの料理につけ合はせる。淺草海苔を一枚づゝ賣る。

上丸、上々丸など稱へて胡桃いつもあり。一寸煎つて、飴にて煮る、これは甘い。

蓮根、蓮根とは言はず、蓮根とばかり稱ふ、味よし、柔かにして東京の所謂餅蓮

根なり。郊外は南北凡そ皆蓮池にて、花開く時、紅々白々。

木槿、木槿にても相分らず、木槿なり。山の芋と自然生を、分けて別々に稱ふ。

扇、皆いかとのみ言ふ。扇の地紙形に、兩方に袂をふくらましたる形、大々小々

々いろ／＼あり。いづれも金銀、青、紺にて、圓く星を飾りたり。關東の扇はな

きにあらず、名づけて升扇と言へり。

地形の四角なる所、即ち榊形なり。

女の子、どうかすると十六七の妙齡なるも、自分の事をタアと言ふ。男の兒は、ワシ

は蓋しつい通りか。たゞし友達が呼び出すのに、ワシは居るか、と言ふ。此の方はどつ

ちもワシなり。

お螻殿を、佛さん蟲、馬追蟲を、鳴聲でスイチヨと呼ぶ。鹽買蜻蛉、味噌買蜻蛉、

考證に及ばず、色合を以て子供衆は御存じならん。おはぐる蜻蛉を、※と言ふ。

螢、淺野川の上流を、小立野に上る、鶴間谷と言ふ所、今は知らず、凄いほど

多く、暗夜には螢の中に人の姿を見るばかりなりき。

清水を清水。——桂清水で手拭ひろた、と唄ふ。山中の湯女の後、朝なまめかし。

其の清水まで客を送りたるものよし。

二百十日の落水に、鯉、鮒、鯰を掬はんとて、何處の町内も、若い衆は、田圃々々《く》へ總出で騒ぐ。子供たち、二百十日と言へば、鮒、カンタをしやくふものと覺えたほどなり。

謎また一つ。六角堂に小僧一人、お参りがあつて扉が開く、何？……酸漿。味噌の小買をするは、質をおくほど恥辱だと言ふ風俗なりし筈なり。豆腐を切つて半挺、小半挺とて賣る。菰蕒は豆府屋につきものと知り給ふべし。おなじ荷の中に菰蕒キツトあり。

蕎麥、お汁粉等、一寸入ると、一ぜんでは濟まず。二ぜんは當前。だまつて食べて居れば、あとからくつきつけ装り出す習慣あり。古風淳朴なり。たゞし二百が一錢と言ふ勘定にはあらず、心すべし。

ふと思出したれば、鄰國富山にて、團扇を賣る珍しき呼聲を、こゝに記す。

團扇やア、大團扇。

うちは、かつきツさん。

いつきツさん。團扇やあ。

もの知りだね。

とところで藝^{げい}者^{しや}は、娼妓^{をやま}は？……をやま、尾山^{をやま}と申^{まを}すは、金澤^{かなざは}の古稱^{こしやう}にして、在^{ざい}方^た鄰國^{りんこく}の人達^{ひとたち}は今^{いま}も城下^{じやうか}に出づる事^{こと}を、尾山^{をやま}にゆくと申^{まを}すことなり。何^{なに}、その尾^を山^{やま}ぢやあない？……そんな事^{こと}は、知^しらない、知^しらない。

大正九年七月

青空文庫情報

底本：「鏡花全集 卷二十八」岩波書店

1942（昭和17）11月30日第1刷発行

1988（昭和63）12月2日第3刷発行

※題名の下にあった年代の注を、作品末に移しました。

入力：門田裕志

校正：米田進

2002年5月8日作成

2011年3月20日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

寸情風土記

泉鏡花

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>